

# 大学生の国語国文学の教養の現状

—フランスのばあい—

広島大学 佐藤 弓 葛

私が、きよう皆さまにお話しする内容は我が国の国語・国文学と言うものとは違いますから、多少内容がずれますけれども、それでもフランスの大学のあり方と、国の教育に対する態度についてお話し致しますと、色々な点で御参考になるかと思ひまして、これから暫くお話し申し上げます。

フランスはやはり御承知のごとく、文学と美術の国であります。従つて国語学、国文学の水準が非常に高いのであります。特に中等教育では、国語を猛烈に鍛えますから、そう云う教官を養成しなければならぬ大学のレベルがそのために必然的に高く、従つて運動スポーツとかクラブ活動と云うものが大学では全然出来ないのであります。私は、きよう会場の皆さまにその点について知ってもらいたくて話すことが多いと思ひますが、ちようどこの三・四日前の火曜と水曜に、フランスでも有名な雑誌「マツチ」の記者が二人みえました。そして私たちの研究室へ参りまして、一番最初に発した言葉が「この大学では、どうして学生が学内で運動しているのか？」

大学内で運動をするのか？ 大学と云うのはアカデミーでは

ないか。研究する所だが？」と云うことでした。

実際、フランスのソルボンヌには運動場は全くありません。私のおりましたブルターニュ（パリより急行で三時間半ほど西へ行つた処で、地図で見ますと、海をへだてて丁度イギリスの下になります）のレンヌ大学にも勿論運動場がありません。それが本当の大学、アカデミーのありかたなのです。それでも学外には「ホワイエ」と言ひまして、（これは学生の集会所ですが）ここにはビンボン台とか、テニスコートとか、サッカー場などがあります。

これは私達が学んだ戦前の大学で、体育がありませんでしたから、そう云う点で、むしろ、あり方としては昔の日本の大学と同じで、現在の日本の大学システムはアメリカン、システムですから、この点でフランスとは全く違つています。そして、確かにフランスはオリンピックではビリでした、特に文明国の中では。最後に馬術で金メダル一つを取りましたけれども、スポーツ界では惨めなものでした。しかし、これに反し文学の世界では最高の勲章と云いうるあのノーベル賞受賞者ジャン・ポール・サルトルが出ました。この様にフランスは文学・人文科学の分野では立派に世界の最高を歩んでおります。しかも彼は何千万円の賞金を断りました。これがフランスの本当の反骨精神で、こう云うことはなかなか出来るものではありません。そこにやはり学問の真髄といったものが感じられます。我々はそう云うものを本當に學んでいなければ

ばいけないのではないか！ すくなくとも學問にたずさわる者なら、たとえ學生にせよ！。

日本ではウエイト・リフティングの選手が大学生です。「あれは重労働者のやる仕事ではないか？ フランスでは想像することも出来ない」とフランス人は驚いています。本當に我々は大いに考えなければなりません。フランスの大学には農学部がありません。工学部がありません。とにかく農学部・工学部と云うのは純粹の學問ではない。それは技術や労働だと言うのです。そのため、ユニヴェルシテの中には學部として入っておりません。こう云うとだいたい時代遅れの感じがしますが、フランス伝統の大学のあり方という点で、ここでどうしても學制々度と云うものについてお話しめんと、フランスの大学の現状がわかりませんので、内容がまた多少それますが、これについて少し話しをさせていただきます。

フランスでは小学校が五ヶ年、中学校が四ヶ年ですから、結局日本の六・三制に當るわけで、日本同様義務教育です。ただ違ふ点はこの小学校でも中学校でも、どしどし落第させることです。それで、大體中学校の義務教育を終えた時に、大方のフランス人は社會に出ます。大學に残るといふのは文字通りエリート、いわゆる選ばれた人で、こう云う点でも明治・大正時代の日本の學士様といったものに似ておりますが、とにかく大學に行くと言ふのは真剣に學問をする（ス

ポーツをするのでなく）ために選ばれた人たちが行きます。

それはどうしてかと申しますと、中學の前期の四年（義務教育）が終りますと、中学校の後期三年ですね、これは日本で云う高等学校に値いしますが、この後期三年の十五・十六才で國家試験があります。フランス語でバカロレアと言いまして、文部省が問題を出しますが、その試験に合格しない限り、如何なる大學へも入学出来ません。この國家試験と言ふのがとてもむづかしいのです。そして、その最初の第一次は全部國語の問題です。例えば、バスカルの思想の中の細かい点についての問題が出て、それについてのデイセルタシオン（論文）を書くのですから、十五・十六才の青少年にとつてはバツショテと云う言葉が使われますが、これはバカロレアという單語を動詞にして、がむしやらに勉強すると云う意味です。それで一律の國家試験がありますが、それに合格しますと、第二次が十七才、リセーの最終學年であります。第二次では哲學關係（人文科學關係）、それから實驗關係、數學關係という具合で、文理に分れてもう一度試験があります。そしてこの二つの國家試験に合格した時に、はじめて、大學に入れます。その時は大學は無試験です。この点が日本と大いに違います。どこの大學も無試験ですが、フランスには大學がわずか十六しかありません。これは全部國立です。いわゆるユニヴェルシテと云うものです。この他に私立大學が若干あります。フランスで私立大學と申しますとカトリック系

の四大学とプロテスタント系が一枚あるだけです。従って私立大学は学生数からいっても国立と比較して問題になりません。それで、ユニヴェルシテと云うと先ほど言いましたが、文科・法・経・医学・薬学・理科で——農学部・工学部はありませんが——この十六の大学の何処へでも入れます。無試験ですから、その点はいいいのですが、(しかしこれまでに鍛えるだけ鍛えております。特に国語学・国文学、そして国語学ではグランメール(文法)がやかましく教えこまれます。)これはユニヴェルシテに行く大学生に限られるわけです。この外フランスにはもう一つグラランド・ゼ・コール(これは英語だとグレイト・スクールで、そのまま日本語に訳すとこれがむしろ大学といった方がいいのですが、フランスではこれを大学と云わず、高等専門学校と言っています。)と云うのが二十三校あります。これも全部国立ですが、この高等専門学校の方には大変むづかしい入学試験があります。特にその中でも、エコール・ノルマル・シュベリユール(いわゆる高等師範)はフランスに於ける最高の学府であります。

この試験は先にお話した<sup>バカコレア</sup>国家試験に優秀な成績で合格した者が大学に進学せず、再びリセーに戻って二・三年勉強しなめて受験するのですが、それでも十人に一人というむづかしさなのです。こうして、合格した者が文字通りエリートですが、彼等は主に司法官・外交官・大学教授などの上級職に就く人でありませぬ。

もうひとつは国防大学です、いわゆる軍需高等専門学校で、エコール・ポリテクニクと云いまして、これも有名で、この学生だと云いますと、尊敬的ですが、エコール・ポリテクニクは日本語では大体理工科大学と訳されています。この試験も大変むづかしい。

それで、この様なグラランド・ゼ・コールの二十三校は行政・軍事・鉱山・土木・郵政・農政・外国語高等専門学校といったものでありますが、先のユニヴェルシテと云われる方が二十七万人で、グラランド・ゼ・コールの方は学校数は多いのですが学生数は僅か三万一千人。従って双方を合計して三十万(強)いるわけです。日本の七十余万人と比べますと半分以下ですから、数は僅なものですけれども、その代りこれら高等教育を受けた人は鍛えてありますから、学問に対してはハガネ入りです。日本でも昔はかなり、それに似たものが見られました。最近では大学に入ってしまうと急に勉強しなくなる傾向がある。先きほど最初の講師のかたがお話になりましたように、それは日本人の体質とか性格から来るもので、長続きしないのかも知れませんが、これから学問に入ると言うところでどうも挫折しがちであるのは、何としても残念なことです。

フランスの大学では、大学に入ってから容赦なくふるい落とし、最後に残った者だけに資格が与えられます。そうしたやり方で進みますから、どうしても大学で運動しているわ

けにはいかない。それからクラブ活動をやっているわけにも  
いかない、と云いますのは、やはり大学に入りますと學問に  
対する態度が一層きびしくなるからです。一つの例を挙げま  
すと、私のいましたレンヌ大学の文学部ですが、最初の一年  
には教養課程があります。この教養課程では、特に国語・  
国文学がやかましく、試験は第一回と第二回があり、講義が  
十月に始まり翌年の四月の復活祭が終つて五月六月に入ると  
第一回の試験即ち筆記試験と口頭試問の両方があります。そ  
れに落ちた場合、第二回が夏休みを過ぎて九月にもう一度筆  
記でも口頭でも落ちた方があります。二回続けて落ちるとも  
う大学には残れない。残つていても免状を貰えないから大学  
をやめる。ですから大学を卒業する者は最近中央公論社から  
出版された本によりますと一割八分即ち二〇%を出ないと記  
されていますが、私はそれほど大学の卒業者が少ないと思  
いませんけれども、どしどし落ちますことは確かです。私の  
考えでは落ちた学生も一年・二年また頑張りますから六割程  
度は出ているのではないかと思います。

今度は試験課目の内容にふれますと、フランス文学の試験  
問題の一例ですが、試験の単位が大変少ない。大学のプロペ  
ドゥティック（教養課程）でも前期が二単位、後期が二単位  
で計四単位を取ればいいのです。その試験の時に、例えばフ  
ランス文学の前期ロマン派で有名なシャトブリアンの講義  
をやっていますと、その講義を聞きまして自分でその周囲の

作家なり作品も大方勉強してやっけて行く。そして試験に臨  
む。それから、これは私の知っている女子学生の落ちた話し  
なんですけど、シャトブリアンの筆記試験で通り、次の  
口頭試問にまわつて、どんな問題が出たかと申しますと、彼  
女は、シャトブリアンについてはどの作品が出て、どんな  
思想をきかれても答えられると思つていたのです。すると教  
授にマダム・ドゥ・スタール——シャトブリアンと対立し  
た、当時の有名なロマン派の開拓者——のコーリスと云う小  
説についてきかれたそうです。残念ながら彼女はその作品に  
ついて全然知らなかつたので、理屈抜きに落とされました。

大体試験はそう云うやり方なのです。ですから多くはやら  
ないけれども、たとえ一科目にせよ、とにかく徹底的にや  
る。日本ではただ単位を取ればよい、単位をとつてさえいれ  
ば押し出して貰える。そう云う点がアカデミックの本質の相  
違点であります。そして、大学の二年三年で専門課程に入り  
ますと四つの高等研究証書が出されます。最初のがリッサン  
ス、いわゆるライサンスと云つて大学の免状です。リッサン  
スを取ると小学校の先生になれます。その次にカベス（Cape）  
と云うのがありまして、これは頭文字を略したもので、中学校  
の先生になれます。この辺までは選ばれて大学に入って来た  
学生ですから、真面目に勉強して少し頑張れば順調に行きま  
すが、その上にアグレガシオンと云うのがあります。これは高  
等教員になれる資格で、その試験はバリー（ソルボンヌ）大学

でやります。従つてアグレガシオンを受ける者は全国からバリーに集つて来ます。上級国家試験と云える程度の高いものです。この広島大学のフランス文学に昨年から来られたイレニス・メックスという女の先生もこのアグレガシオンを取っています。この資格を取つた者をアグレジェエと云いまして、中学校・高等学校の教員になります。大学の助手にもなれます。大学のアシスタントは講義を持てます。アグレガシオンは大学に入つてから大体六・七年頑張りますと取れます。そして、その上にドクトラ・デタ即ち国家博士があり、これを取らないと原則としては大学の教授にはなれません。大学で助教授・正教授などはドクトラ・デタを持っています。国家博士の試験日は事前に全て新聞に公開されます。論文提出は一年前ですが、これが大体大学の課程を終了してから六年ないし十年かかります。ですから三十から三十四・五才にかけて懸命に勉強します。この試験は審査員も五人。それにドワイヤン（学部長）も来ます。審査員はむろんフランスに於ける、その道の専門家です。国家博士に合格すれば大学の教授にもなれますし、合格した論文はすべて公表しなければなりませんので、国家が費用を負担してくれます。

文学の場合は主論文が千頁にのぼるものもありますし、さらに副論文も二・三百頁書きますので、それこそ命がけの研究です。この様にして最後まで、落とし、落とし勉強させて残す。そして残つた学者が大学教授の職につきますから大臣や

知事に劣らず尊敬されます。給料も実に多く、我々の給料などははづかしくて口にも出せません。日本のように学者の給料が安く、学者は勉強だけすればいいんだといって冷遇していたのでは、絶対に学問としても伸びることが出来ません。世界の学問の水準から段々に引きはなされて行きます。

それからもう一つの特徴は、私のいたレンヌ市の市長はレンヌ大学の歴史学の教授でした。こう云うふうに大学の教授がそのまま市長になる。（勿論その間は大学で講義は出来ませんが。）日本では公務員が現職のまゝになると云うことは禁じられていますが、大学の教授がそのまま市政に対して学問の堅実さをもって当りますから、市民の信頼・尊敬と云うものは実に絶大です。もちろん、乱れるということがない。任期が来て辞めればまた大学で講義を続けます。こう云うところにアカデミーの本当の意味がある。あゝ、これが学問の生かされた真の姿であると、ひしひしと感じさせられます。

最後に、フランスでは現在でも古典コース即ちギリシヤ・ラテンの研究が盛んです。同時にロシヤ語・イタリア語・スペイン語・英語など外国語の研究をする近代コースもありませんが、フランスにとつてはやはりギリシヤ・ラテンそれに国文学が首位にたちます。この古典をやると云うことによつてフランス人はヨーロッパの生徳・ヨーロッパの起源を理解するのです。そう云うものが本當にわかつていなければ国を治めるといふことも充分に出来ないといふフランス人は考えるので

す。そのため、フランスでは外交官でも普通の文学者がなります。それから大臣・大統領なども文学出の人が多いためです。そう云うふうに学問の水準そのものが高く、国を治めるために活用され、真の文化人が心の政治を行なう。そこに本当の意味でのアカデミーというものがあるのではないのでしょうか。

内容が国文学から外れまして申訳御座いませんでしたが、要するにフランス人の学問に対する態度を知っていただいで、我々が反省すべき処は大いに反省して、前進すべきではないかと云うことをお話した次第であります。